

構造終了後の世界の再編の動きのなかで、アラブ民族主義がどのようにみずからに立脚して発展しているのか、見ていきたい。

一 アラブ側の解決努力

当事者であるイラクは、冷戦構造終了後、ガルフ戦争以後の自国の延命のために、軍事大国化の道を選択し、イスラエルへの攻撃的姿勢を誇示することによって、アラブ民族主義の旗手として、再編過程のアラブ世界のイニシアチブを作ろうとしてきた。それが、核開発努力、化学会兵器誇示の発言に見られる。また、石油のだぶつきと値下がりによって、戦後再建の財源であるべき石油収入が激減し、停戦合意後除隊した五〇〇万人のイラク人の失業問題が悪化するなど、状況打開に迫られていた。そこで、値下がりの元凶としてOPECカルテル破壊をしているとクウェートによるイラク油田の「盗掘」の保証を要求したのである。それが、八月一日にクウェートに侵攻した直接の動機である。

この動向のなかで、アラブ・レベルでの対応が統一していないことを、米帝は最大限利用して、軍事介入を行つていった。

第一は、エジプトが代表するように、アラブの枠内での解決をめざすが、アラブ反動の意向を反映したものとしての性格があり、反帝の質をもつていいものとしてある。第二は、シリアルアの反帝のイニシアチブである。これは、イラクのクウェートからの撤退を第一にして、帝国

アラブ民族主義の反帝闘争の発展の道を模索していた。とくに、ソ連系ユダヤ人移民が数年内で一〇〇万人もイスラエルに「移住する」動きのなかで、イスラエルとの個別交渉に歯止めをかけ、イスラエルとの戦略均衡作りの戦略をどう推進するのかが問われていた。

シリアルエジプト首脳会談に先立って、カッダム副大統領記者会見（イッティハド紙—ガルフ）を行い、「シリアルアはアラブ国—イスラエルの直接交渉には反対する。米ニシアチブといふものは存在せず、あるいはシャミールイニシアチブである」として、ベーカー・プランと被占領地での「選挙」問題へ言及し、「アラブ—イスラエル紛争をレバノン問題と分離させねばならない、アラブ—イスラエル紛争は長期にわたるものであるのに對して、レバノン問題はそうではない。レバノン問題をアラブ—イスラエル紛争と混在させるレバノンを破壊してしまう」と発言した。また、アサド大統領自身も、アレキサン드리ア入りした二日めの一五日に、国際会議によるアラブ—イスラエル紛争解決が軸であるとの従来の立場を堅持した。

イラクのクウェート侵攻に関しては、シリアルアは、即、アラブ首脳会談を呼びかけ、アラブ・レベルでの解決のイニシアチブを打ち出した。シリアルアが最も阻止したいと考えているのは、アラブの分裂であり、それは、帝国主義の介入につながるからであり、イスラエルの陰謀を招くからである。現在のシャミール政権は、イスラエル誕生以来の極右政権であり、この混乱を新

たな戦争に挑発していく危険性をもつていて、シリアルアは、現在のシリアルアの力量とアラブの力量ではイスラエルとの戦争に耐えられないという認識にある。

事態がアラブ領土への帝国主義軍隊の介入、とくに、迅速な米帝のサウジへの派兵によって、アラブとしての対応がより緊急に問われることになり、緊張を押さえる方向で、展開したこと、アラクの動きを口実にイスラエルが動きだすかもしれない最悪な段階に発展した時、次善の策としては、アラブにとって不利な展開になるのを牽制、阻止しようとした。さらに、シリアルアは、ヨルダン、イエメン、リビア、PLOが反対し、が棄権・保留という事態になった。イラク、リビア、PLOは、米帝軍の撤退とアラブの解決を主張した。

対応上で主要な相違は、シリアルア、エジプトのいうイラクのクウェート侵攻が問題を作ったので、まず、イラクが撤退すべきとするのか、

の和平の一環として、パレスチナ問題を米帝と共にしつつ、エジプトのイニシアチブを發揮しようというものであった。それが、シャミールの「選挙案」を補完する形で出されたムバラク案であり、ベーカー提案として出されたカイロでのパレスチナ—イスラエル直接交渉を実現させようとしてきたのである。

イラク、アラファト議長は、このエジプト—PLOのイニシアチブが米帝の対PLO対話打ち切りによって頓挫し、かつ、シリアルアがエジプトとの和解、接近の展開を示したことに対する反米、反シオニズムを打ち出して対抗しようとしてきた。そして、アサド大統領が開催されたアラブ連盟緊急外相会談で、エジプトをイラクとPLOが非難したのである。この時点で、すでに、アラブの再編をめぐるインシアチブ争いが浮上した。

イラクの侵攻—軍事併合に対するエジプトの立場は、一定、原則的であり、アラブの枠内で解決しようとするものであるが、反動も進歩的民族主義政権も共同歩調が取りやすいものである。エジプトはシリアルアと共同して、クウェートからのイラク軍の撤退とガルフ地域からの外国軍の撤退、クウェートの合法政権の回復、アラブ合同軍による平和維持を打ち出している。

この時点では、アラブ・レベルでのエジプトに対する負債を返還できないほど

の移転、アラブ・サミット開催が計画され、今年の秋には、アラブ連盟本部のカイロへスチナを打ち出した。

こうしたエジプトの展開に対し、ガルフ反動諸国は、経済援助を与え、支持してきた。これに対し、アラブの力を動員して対応していく必要性に迫られている。そのカードにパレ

エジプトは、冷たい平和が、結果的には、イスラエルへのソ連系ユダヤ人の大量流入—シャミール「戦争内閣」の誕生という脅威になっており、それに対して、アラブの力を動員して対応していく必要性に迫られている。そのカードにパレ

エジプトの对外政策としては、米帝との関係、イスラエルとの「冷たい平和」が、結果的には、イスラエルへのソ連系ユダヤ人の大量流入—シャミール「戦争内閣」の誕生という脅威になっており、それに対して、アラブの力を動員して対応していく必要性に迫られている。そのカードにパレ

エジプトは、冷たい平和が、結果的には、イスラエルへのソ連系ユダヤ人の大量流入—シャミール「戦争内閣」の誕生という脅威になっており、それに対して、アラブの力を動員して対応していく必要性に迫られている。そのカードにパレ

たえるよう」呼びかけた。

だが、現実問題としては、ガルフ反動の蜂起支持、支援を失い、P L Oとガルフ反動王国との矛盾が深まる方向に向かった。具体問題としても、ガルフへ労働に出掛けていたパレスチナ人が大量に失業し（サウジなどは、夏季休暇で被占領地に帰っていたパレスチナ人に、帰国許可をださなかったり、カタールから追放されたり、クウェートから逃避せざるをえなくなるなど）、被占領地への送金が激減したとされる。加えて、英紙が報道したように、サウジがP L Oへの経済援助を打ち切っている。

在外のP L Oは、「イラク対世界」という対峙構造が米帝の主導で固まった九月一日に、カイロで開催されたエジプト－シリアのイニシアチブによる緊急アラブ外相会議には参加しなかつた。一方、被占領地では、ハマスが、二九日の段階でイラク批判に立場を変更し始めた。P L Oとしては、一九日に、ガルフ危機に関する最

反動を敵に回すのかという問題の根底にある帝國主義軍の長期駐留をどのように阻止するのかということだが、アラブの枠組みで解決することを第一にしようとする勢力内部で、まだ統一した対応が作れていないのである。パレスチナ人民が蜂起をもってイスラエルの領土侵略・占領・拡張政策に対峙している時に、ガルフに帝國主義軍が介入・駐留してきた。これに対して、どのように撤退させるのかを第一にすることが問われるだろう。イラク支持の立場では、アラブの対応が分解していくだけであり、それを理由として、ますますガルフ反動王国が、帝國主義軍隊による防衛を強めるだけである。ガルフ戦争の時もそうであったように、漁夫の利を得て、いるのはイスラエルで、八月度だけで、一万六〇〇〇人ものユダヤ人が流入してきたのである。一方、ヨルダン、アルジェリアなどモスレム原理主義潮流の強力な国では、公然と、イラク支持の委員会が形成され（それぞれ、八月七日、

パレスチナ・レベルでは、PFLP（パレスチナ解放人民戦線）、DFLP（パレスチナ解放民主戦線）などは、すでにガルフ危機勃発以前に、ヨルダンの「民主化」過程に公然と登場していた。彼らは、イラク系、シリア系ベースの勢力と協力して、ヨルダンにJNDA（ヨルダン民族民主アラブ連合）を形成し、ヨルダンにおける上からの「民主化」のイニシアチブを左派がとっていく方向を示した。また、PFLPのハバシュ議長は、九月に入って、バグダッドを訪問し、フセイン大統領と会見し、その後ヨルダン入りしている。PFLPは、基本的にアラブ合同軍派遣政策に反対している。その根拠は、帝国主義、アラブ反動王国のイニシアチブの下にアラブ合同軍を派遣することは、帝国主義と反動の利益になるだけであるというものである。それよりも、帝国主義軍隊の介入に反対することを第一にするべきと要求している。さらに、キャンプ・デービッド国家と規定する

レスチナ人民レベルでは、イラク支持の感情が強い。サッダムと名付けるパレスチナ人の母親が被占領地で増えたのも、こうした感情を反映している。そして、ハマスの呼びかけたイラク支持のゼネスト（一五日）に人民は熱狂的に応えた。また、統一指導部も、アピール六一号において、「アラブのイニシアチブ（イラクのイニシアチブ含む）歓迎」、「すべての関連者がガルフから撤退し、国際的な合法性の枠組みの中で、アラブの総体的な利益と個々の当事者の利益を尊重する調整をもたらす」という内容で、

初の公式声明を発表したが、そこでは、イラクに対する態度は、明確に打ち出していない。一方、同日には、パレスチナ国民基金會頭（パレスチナ國の藏相に相当）が、アブ・ダビでイラク批判を出しているが、個人見解にとどまっている。

この背後には、イラクが反米、反動王制への「聖戦」を呼びかけていたが、その後「人質問題」を起こし、もはや、国際レベルのみならずアラブ・レベルでも支持が困難になってしまったことがある。二月二〇日、アラブ首長国連邦、ダ

（一）イラクへの志願兵まで組織された。反動王制「聖戦」の呼びかけ以前のことなので、反ガルフ反動、反米感情がどれだけ強いかを玉しておきたい。しかし、「人質問題」に発展してから、アルジェリアのモスレム原理主義潮流もイラク支持をトーン・ダウンせざるをえなくなっている。

こうした人民レベルの歴史的なかつ自然発生的なガルフ反動への反感、反帝の感情がイラク支持という形で噴出した時、指導勢力は、どの

ジプトはエジプトで独自の利益から、それに同ラブの枠組みで解決していくうとしており、エジプトはエジプトで独自の利益から、それに同調している。

イラクの態度を曖昧にしている流れが、初期の段階では存在していた。これは、それぞれの立場が違っている。反米の立場でアラブ民族主義を発展させようとしているリビア、自国の経済再建を最優先していかざるをえない状況に置かれたアルジェリア、歴史的なサウジとの対立からイラクとの同盟を優先させるイエメン、また、国内の反政府感情がイラク支持に動きかつた、モスレム原理主義潮流の勢力拡大と進歩勢力との指導権争いが表面化しそうなヨルダンとチュニジア、そして、蜂起の力を背景に、エジプトとの関係を軸にイスラエルとの交渉にもちこむべく対米交渉に踏み切ったものの、現在、頓挫している PLO である。

ヨルダンは、地理的にも、イラクの兵站・補給の生命線であると同時に、パレスチナと直結している分、今回の危機の対応にフセイン国王の手腕が發揮されている。ヨルダンへの経済援助を引き出す好機ととらえ、対イラク制裁には公然と参加していない。その理由として、ヨルダン経済の破綻をあげており、援助を引き出していくことを狙っている。それは一見すると事実ではあるが、ガルフ反動と同様、王制自らは経済困難を味わう訳でなく、ヨルダン人民の反王制を恐れているのである。

だが、ヨルダンには、パレスチナ人が多数存在するばかりか、ガルフ危機以前に、すでに、

勢力の立場

二 人民レベルの反帝感情とパレスチナ革命勢力の立場

アラブ国家レベルでは、イラクのクウェート侵攻・軍事併合を公然とは認するものはないが、ガルフ産油国の支配層への反感が強い。その根柢は、歴史的なものと、現在的なものとの二つがある。歴史的な根柢は、ガルフ反動王制が、英帝の庇護の元に成立してきたこと、その後も、一貫して帝国主義との関係で延命してきたことにある。第一次大戦中から、オスマン・トルコへの反乱と引き替えて、英帝から独立を約束されたはずの「アラブ王国」は、もとのアラブの土地を分断するものでしかなかった。現在的な根柢としては、石油の海に浮かんで、巨額の富を自分たちの豪勢な暮らしに費やし、アラブ民族の発展、援助に向けないことへの批判である。アラブ人民は、石油はアラブ民族の富という認識がある。とくに、アラブの非産油国人民は、IMF、世界銀行などへの対外負債で経済が破綻

ら、ブツシユ政権が、イスラエルへの上陸作戦を口実にP.L.Oとの対話を打ち切り、今年一二月の中間選挙という国内事情から、シオニストの圧力に屈していくとしているからである。それは、アピール六〇号（資料参照）にも表れている。パレスチナ人民にとつては、ソ連系ユダヤ人移民のイスラエルへの流入を後ろ盾に、シャミール「戦争内閣」が、実力で蜂起鎮圧攻撃を強化してくるのに対し、アラブ・レバペルでの反米、反イスラエルの動きを作り出す必要があった。イラクが、クウェートを武力併合した後、英米帝国主義のすばやい対応に反撃するべく反米・反動王制サウジへの「聖戦」を呼びかけたことに対する、パレスチナ人民は支持デモを行って呼応した。とりわけ、イラクの提案した解決策は、アラブの被占領地からのイスラエルの撤退と抱き合せのものであった分、蜂起の存在が浮き彫りになる効果があった。石油王国であるクウェートへの態度、反米の宣伝、イスラエルに撤退を要求する態度などから、パ

ラブの構組みで解決していくうとしており、エジプトはエジプトで独自の利益から、それに同調している。

反政府暴動が人民決起の前哨戦として起つてゐる。そして、ヨルダン人民は、イスラエルの恫喝を受けても、イラク支持国民委員会まで作り、国民レベルのイラク支持になつてゐる。現実には、フセイン国王は、イラクの要求である補給を黙認し、米帝からの援助も引き出し、かつ、国内の王室支持モスレム原理主義勢力をを使つて、国内民主化運動そのものを取り込むか、方向をめざしているだろう。

状況に苦しんでおり、直接的な生活の圧迫を受けているし、パレスチナ人民も、シオニストの占領支配下で苦しんでいる。その分、反発が強いのである。イラク支持のデモが、被占領地ヨルダン、イエメン、リビア、スーサンなどでもまた起こったのには、こうした基本的な感情がある。

時したわけではない。また、石油戦略の差動は、反動王制の金庫を潤したが、それが欧米に投資され、貧困なアラブ諸国の経済開発に投資されない構造は変わらなかつた。また、この石油戦略発動は、石油メジャーに打撃を与えるどころか、石油価格の高騰で、むしろ、利潤をあげた。また、ガルフ反動諸国は、八一年には、GCC（ガルフ協力会議）を結成して、イラクなどの他のアラブ産油国を廃し、軍事・経済ブロック化をめざした。これは、イスラエルの「建国」を機に高揚し、続々と共和国が誕生し、連合、連邦の努力が重ねられるアラブ民族の発展の方に向に対して、近代化・工業化をもつて、封建的な支配体制を再編しながら、自らの支配維持を計るためであった。

八〇年代になると、逆石油ショックで、石油の値段が下がり、アラブ反動王制は、これまでのように、アラブ内部の紛争に金を出すのではなく、政治解決を計つていく方向を打ち出した。とくに、八二年の九月にペイントを撤退したPLOがエジプトと接近していくにつれ、ペレスチナ問題の政治解決方向が強まるのを歓迎した。

米帝は、八二年にイスラエルとの戦略同盟に踏み切つて以降も、アラブ－イスラエル統合支配戦略を変更はしなかつたが、ペレスチナ革命の後退期とイスラエル内部の再編矛盾に乗じて、ペレスチナ蜂起の勝利にとって、不可欠だからである。

アラブ民族主義の歴史において、帝国主義の介入の歴史の中で、アラブ反動はどのような位置にあるのかを、ここで概略的に見ておくことにしたい。一九世紀にアラブ世界に登場した帝国主義は、当時のオスマン・トルコ帝国の領土を次々に脅かした。そして、鉄道施設権、石油採掘権を要求した。

現在のアラブ反動王制の樹立と、帝国主義の先兵としてのシオニズムを利用して人工国家イスラエルを強要し、アラブ－イスラエル紛争の姿を作つたのは、英帝国主義である。それは、中東に石油資源があること、東西の要衝という

ことを意味した分、イスラエルの軍事冒険主義に同調する国务長官（ヘイグ）まで出た。イスラエル、エジプトに対する援助は、米帝の対外援助の三分の一に相当しているのは、このためでもある。イスラエル、エジプトは、米帝にとって、中東の支配を貫徹する二本の柱を意味したからである。

アラブ反動、とくに、ガルフ反動は、八〇年代末から始まつたソ連・東欧での再編、九二年に迫つたECの統合市場に対して、アラブの地域としてのブロック形成の必要性を認識した。反動王制内部には、一貫して、親帝国主義派と、民族的傾向を示すものとの矛盾があると伝えられるが、基本は、自國の延命に最も有利な選択を行うという路線でしかない。アラブ－イスラエル紛争の直接交戦国でもないガルフ反動王制は、帝国主義、とくに、米帝との関係を軸に発展していくとしても、直接それを打ち出せない理由があつた。イスラエルの領土拡張主義、人種差別主義的戦略と、それを援助する米帝の立場は、アラブ民族にとって許しがたいものと見てある。また、ガルフ反動王制は、自国内にペレスチナ労働者を多数抱えていることもあり、ペレスチナの大義、アラブの大義に反することはできないのである。それが、今回のガルフ危機を契機に、帝国主義軍隊の導入の口実を得ることになり、かつ、ペレスチナ人民が公然とイラク支持の立場を示しているのに対してもそれを押さえこんでいく方向にある。ガルフ反動王制にとっては、ガルフ危機は、反帝の方向

エジプトとシリアが和解していくことも、批判的立場を表明し続けてきた。また、レバノン問題においても、安定化が進行することは、ペレスチナ武装勢力の存在形態への国家的統制が強まるこことを意味し、ペレスチナ勢力はそれを望んでいないという問題もある。こうして、シリアとPFLPとの政策の相違が表面化していく。問題は、帝国主義の軍事介入を招いた事態に対しても、どのように、撤退させる条件を作るかということである。なぜなら、それが、ペレスチナ蜂起の勝利にとって、不可欠だからである。

PLOとしても、イラクの反帝の立場を支持しつつも、反動国家とはいえクウェートを軍事併合したイラクを（国際的動きの中では）そのまま容認できない現状にある。

三 帝国主義の介入とアラブ反動の位置

アラブ民族主義の歴史において、帝国主義の介入の歴史の中で、アラブ反動はどのような位置にあるのかを、ここで概略的に見ておくことにしたい。一九世紀にアラブ世界に登場した帝国主義は、当時のオスマン・トルコ帝国の領土を次々に脅かした。そして、鉄道施設権、石油採掘権を要求した。

英帝は、アラビア半島からは、前出のフセイント勢力と親トルコ勢力を駆逐し、ヒジャズ（メッカ地方）とナジド（リヤドを中心とする地方）をサウド家が統一するよう仕向け、そのサウド家をクウェートのサバー家が支援するような構造を作つた。また、パレスチナからは、反英勢力であるフセイニ（現在の蜂起において、被占領地パレスチナの指導者の一人とされるファイサル・フセイニの父）を追い払つた。そして、英、仏、露が「サン・レモ会議」の秘密協定で分割した（ロシア革命後、ソヴィエト・ロシアをとつて、中東における支配権を握り、安い石油の安定供給を確保しようとした）。

英帝は、アラビア半島からは、前出のフセイント勢力と親トルコ勢力を駆逐し、ヒジャズ（メッカ地方）とナジド（リヤドを中心とする地方）をサウド家が統一するよう仕向け、そのサウド家をクウェートのサバー家が支援するような構造を作つた。また、パレスチナからは、反英勢力であるフセイニ（現在の蜂起において、被占領地パレスチナの指導者の一人とされるファイサル・フセイニの父）を追い払つた。そして、英、仏、露が「サン・レモ会議」の秘密協定で分割した（ロシア革命後、ソヴィエト・ロシアをとつて、中東における支配権を握り、安い石油の安定供給を確保しようとした）。

英帝は、アラブの親英勢力とシオニズムの手綱をとつて、中東における支配権を握り、安い石油の安定供給を確保しようとした。

英帝は、アラビア半島からは、前出のフセイント勢力と親トルコ勢力を駆逐し、ヒジャズ（メッカ地方）とナジド（リヤドを中心とする地方）をサウド家が統一するよう仕向け、そのサウド家をクウェートのサバー家が支援するような構造を作つた。また、パレスチナからは、反英勢力であるフセイニ（現在の蜂起において、被占領地パレスチナの指導者の一人とされるファイサル・フセイニの父）を追い払つた。そして、英、仏、露が「サン・レモ会議」の秘密協定で分割した（ロシア革命後、ソヴィエト・ロシアをとつて、中東における支配権を握り、安い石油の安定供給を確保しようとした）。

英帝は、アラブの親英勢力とシオニズムの手綱をとつて、中東における支配権を握り、安い石油の安定供給を確保しようとした。

アラブ反動、とくに、ガルフ反動は、八〇年代末から始まつたソ連・東欧での再編、九二年に迫つたECの統合市場に対して、アラブの地域としてのブロック形成の必要性を認識した。反動王制内部には、一貫して、親帝国主義派と、民族的傾向を示すものとの矛盾があると伝えられるが、基本は、自國の延命に最も有利な選択を行つて、アラブ民族にとって許しがたいものとみなされた。帝国主義軍隊の介入・駐留体制の是認、体制化を意味する。

ガルフ危機発生後、日帝海部政権は、国連に先駆けて制裁措置に踏み切るなど、米帝と一緒に防衛という枠に代えるチャンスなのである。それは、帝国主義軍隊の介入・駐留体制の是認、

①アピール六〇号 アル・アクサの呼びかけ 戦闘的な大衆の皆さん。米政府は、自國の門戸を閉ざすことによって、ユダヤ人移民がシオニスト国家（中東における植民地主義陰謀の忠

資料

(要約)

卷之三

反帝での国際連帯を鮮明に打ち出す必要がある。それは、日本の進歩勢力、人民にとっては実態としてはNATO軍である多国籍軍に対する海部政権の「貢献策」を止めさせ、まず、アラブの解決努力を支持する立場にたたること。そして、日帝が、「貢献策」では不十分であるからとして、自衛隊派兵の口実にしようとしている策動に反対することである。日帝のアラブ人民への直接的な敵対行動をいっさい許さないことが、第一に必要である。今の国際情勢のなかで、とくに帝国主義本国での闘いが、国際主義の在り方を作り出し、アラブーアジア人民のために、人民レベルの連帯を強化していくことが問われている。

（実な手下）に行かざるをえなくさせた。米政府はシオニスト存在との完全な同盟をめざしており、その同盟は自らの侵略的性格を表現したのである。

ムバラクは、キャンプ・デービッド体制のゴットド・ファーザーであり、中東全域にキャンプ・デービッドの過程を宣伝するという米の反アラブ陰謀を実行するのが、唯一の機能である。一方、インティファーダは、自らの活動と運動をもって、パレスチナ人の合法的な鬭いと正義の鬭争を欧洲が支持する立場に向かうのに貢献した。た。

一指導部（以降、統一指導部と略す）は、P.L.O.の旗のもとに、そして、パレスチナ国内のP.L.O.の軍事的一翼の旗のもとに、共同と統一を結合させ、すべての努力と力量を結集させるために、力を合わせていく必要性を強調する。なぜなら、統一あってこそ、我々は勝利をかちとることが可能となるからである。副次的な争いをして、人民の利益を最重要課題として掲げ我々の活動と仕事の基準を人民の利益におこ

三 シャミールームバラクーベーカー提案拒否。独立パレスチナ国家に百万回の支持！
四 祖国に対するユダヤ人移民の強化に、力合戦にて対決

一 勝利の日まで統一を！

り多くの参加をかちとろう。大衆の皆さんがあり活発に人民委員会や、労働組合などに参加して、大衆自身が独立達成にむけてインティファーダを推進するようしよう。

PLOと統一指導部に結集された皆さん。皆さんの闘争魂、そして、統一指導部の決定、勧告を実行するありかたを讃えるとともに、以下を確認したい。

スローガン書き スローガン書きは、政治動員と結集を足す意未において、重要な役割を担つて、大衆自身が独立達成にむけてインティファーダを推進するようしよう。

云々に比べて、今回の特徴は、第一に米帝との結託がより強固なこと、第二に、展開のステップを早めるため改憲ぬきの派兵にむけた枠組みを作ろうとしていること、第三に、国連の枠組みでは可能というコンセンサスを作り、米帝の動きと連動して国連を最大限利用していくこととしていることがある。

このガルフ危機は、パナマ侵略で、米帝が、「地域紛争」に対しても軍事介入するやり方を示したものと同様になるだろう。つまり、今後も、国際世論の支持、国連レベルのコンセンサスをふりかざして、紛争に軍事介入し、その経費は紛争当事国、日帝、欧洲など受益国に払わせるというやりかたである。帝国主義の軍事戦略に変化はなく、合理的な再編を軍事費削減、海外駐留カット・再編という形で展開しているだけである。現在の世界の再編過程で、このガルフ危機は、帝国主義にとっては、米帝が軍事力を投入・長期駐留体制を合法化して、エネルギー一

政権の防衛の形で、足場を築こうとするものである。

また、国連を利用して、帝国主義総体が、帝國主義の権益を侵すものに対して、総力をあげて対峙するという構造を作り出した米帝は、今後制裁措置を実行しない国に対しての制裁措置を国連のコンセンサスで作り出していこうとするだろう。イラクが反帝・反米・反シオニズムの立場で行っているのを利用して、反帝の闘争や反帝の立場に立つ進歩的国家の正義性を解体して、闘いそのものを国連の枠組みで包围して、否定していくこうというものとしてある。

一方、イラクも、国民に耐乏生活をおしつける形で、クウェート撤退の意志を示さず、長期戦体制を作ろうとしている。それは、後方の支援ルートが開かれるのかどうかにかかっている。軍事的には、イスラエルとの戦線が開かれるかどうか、米帝との軍事衝突の規模にかかっていながら、双方とも大規模な衝突を回避する（米帝

がまずクウェートから撤退するのを第一にするのか（撤退すれば、帝国主義軍隊の存在理由がなくなる）として、表れている。それがどう統一されていくのかにかかっていると言えよう。重要なことは、帝国主義の軍事介入、および軍事存在の長期化策動を止めさせる枠組みで一致していくことであろう。その中で、イラクのクウェートからの撤退条件を作り、クウェートの地位や領土問題は、アラブで解決していく道を開いていくことだろう。イラクも、真に、反帝闘争の利益を考えるなら、クウェート侵攻がそのマイナスを作っていることを認め、反帝の利益を擁護していく立場から撤退していくべきだろう。

世界の反帝勢力は、何よりも、第一に、アラブの問題に対する帝国主義の介入に反対し、その撤退を求めることが必要である。現在、反帝の境界線が不鮮明になつたかのようなプロパガンダが敵帝国主義の側から盛んであるときこそ、

海賊政権は、八月下旬に、一〇〇名の医療団、民間航空機・船舶による輸送協力、エジプト、ヨルダン、トルコへの経済援助に合意しただけでなく、自衛隊派遣に対する策動は、自民党内部でも人民の反対が高まるのを恐れて、現憲法の枠内で何かができるという形で、論争の枠を作り、これまでとはうって変わって具体的論争となっている。それが、「緊急援助隊法」改悪や、「国連平和協力法」制定に向けた動きとしてで

三
ガルフ危機の方

支那戦略を展開することを意味するし、日帝は独自利害の追求のために、ますます、米帝と結託した道を歩むことを示している。

も、いつなん、衝突になれば、米軍に数万の死者がでるとの秘密報告によつて直接介入を断念したと言わわれている)方向にある。

アラブの枠組みで解決していくるかどうかは、その一致した内容の方向にかかっている。大きくては、イラクへの態度、クウェートの旧政権やクウェートの地位に関して、帝国主義への態度における相違としてある。

そのなかで、具体的には、反帝を中心にして(イラクを批判しつつも)、帝国主義の軍事介入

しては、九月末までの猶予期間を与える。

教育 教育は、国際的に承認された世界の人の権利である。パレスチナの教育機関を運営し、パレスチナの文化と文明を保護し、パレスチナの教育機関を運営し続けるのは、我々の義務である。同時に、閉鎖された大学や教育機関の再開について、いかなる屈辱的な条件をも拒否するであろう。同時に、教育機関に関する軍令八五四号に従おうとするいかなる試みに対しても、断固対決し続けるだろう。

シオニスト当局に任命された地方公共団体 シオニスト当局は、地方公共団体を任命し、占領当局の補完物としてきた。インティファーダは、種々の民族主義的委員会を通して、それらの地方公共団体がパレスチナ人民の熱望に敵対するものであることを暴露し、それらを有名無実の存在にして孤立させてしまう力量を証明した。統一指導部は、不退転のガザにベイト・ハヌーン、カーン・ユニスなどで、イスラエルに任命された行政委員会を再度設置しようとする動きに警告する。この行政委員会なるものは、我々の人民委員会に取って代わるとする占領当局の替え玉の継続でしかないことを確認する。さらに、ラム村議会、そしてデイエール・ダブワーン町議会が大衆の利益から余りにもかけ離れたものになつたので、即刻、全員が辞任するよう呼びかける。

万歳！ 殉教者に栄光を、獄中者に栄誉を！
我々は勝利する！

PLO・統一指導部 パレスチナ国にて
一九九〇年七月三〇日

②アピール六一号 勝利の呼びかけ

チナの統一と、我々の権利奪回を確認するため全市町村、キャンプで、大衆的な民族統一デモを組織しよう。

パレスチナ人民の唯一合法の代表たるPLO

殉教者に栄光を、獄中者に栄誉を！

我々は勝利する！

PLO・統一指導部 パレスチナ国にて
一九九〇年七月三〇日

チナの統一と、我々の権利奪回を確認するため全市町村、キャンプで、大衆的な民族統一デモを組織しよう。

パレスチナ人民の唯一合法の代表たるPLO

殉教者に栄光を、獄中者に栄誉を！

我々は勝利する！

PLO・統一指導部 パレスチナ国にて
一九九〇年七月三〇日

②アピール六一号 勝利の呼びかけ

インティファーダのパレスチナ人民大衆の皆さん。米とその同盟者どもの軍隊は、アラブの大地に対して、これまでに例を見ない侵略的攻勢を仕掛けている。アラビア半島は、自らの王座を維持するのと引き替えて富んだ国を犠牲にすることを選んだ石油の王達の要請に基づいてやって来た米侵略者の直接支配下に入った。新十字軍の旗手ジョージ・ブッシュは、この新たな米の侵略目標はイラクを投降させ、米のヘゲモニーに従わせることであると公然と声明している。事実、米の占領は、アラブ民族が数百万の殉教者の命をもって払い除けた直接植民地化の時代に引きもどす陰謀である。アラブの土地に対するこの新たな占領は、ブッシュが原則や権利やらの口実を並べても、パレスチナ人民の権利と聖なる大義が言及されるや否や露散する代物である。

我々は、ガルフ危機を包摂し、より大きなアラブの民族的利益を確保するためにアラブの枠組みで解決しようとして、わが指導部が努力を払っていることを歓迎する。我々民族統一指導部（以降、統一指導部と略）は、危機を包摂しようとするアラブの努力を（それにはイラクのイニシアチブも含まれる）歓迎し、パレスチナ・イニシアチブが表明した内容を再確認する。そして、すべての関連者に対して、ガルフからの撤退、国際的な合法性の枠組みの中でアラブの総体的利益と個々の当事者の利益を保証する調整をめざしたこのイニシアチブに応えるよう呼びかける。

イラクが米の軍事的侵略という悲劇的な危機に曝されているが、これは、個別中東に限定されたことではない。したがって、ガルフにおける軍事力の増強を止めさせ、米占領軍と米の支配する軍隊を即時撤退させ、アラブ・イニシアチブが要求するように、国連の旗の下でアラブと国際軍でとつてかわらせるために、全力を動員すべきである。最近の国連安理会決議六五号は、米占領軍により大きな権力を与え、それがによって、アラブ民族の人的、経済的、軍事的能力を危険に陥れた。我々統一指導部は、アラブの全人民、民族主義者、進歩的な宗教勢力に呼びかける。聖なるヒジャズに米が存在を拡大していることに対して、予測される米の侵略に対峙し、それを打ち破り、米軍を祝福された地から撤退させるなかで、アラブの威儀を保持するために、強力で確固とした戦線の形成をしよう。

イラク政府に呼びかける。米の挑発にのらず、

面の着用を戦闘的な活動に限定するとしたこれまでの決定を再確認する。

共同デモ 全国のすべての愛國者の皆さんに對して呼びかける。戦闘的活動を調整し、公共の民族的行事や個別の各党派のデモなどを組織するため、各現場が連携委員会を組織しよう。

諜報機関の役割 イスラエル占領当局は、統一指導部の名をかたってアピールを出してきてるので、この罠に注意しよう。攻撃部隊に呼びかける。麻薬密輸業者を追跡し、麻薬密輸業者どもと関わりを持つどうとする人々に警告しよう。とくに、イスラエル諜報機関が、戦士層への麻薬の持ち込みを狙っているので、注意しなくてはならない。

イドナ町 統一指導部は、殉教者の家族の皆さんが示した自己統制の立場を感謝する。また、イドナ町の全市民の皆さんに呼びかける。襲撃してくる占領当局を勝たせないために、隊伍を整えよう。そして、アル・カリール（ヘブロン）の全市民に呼びかける。統一指導部の指示に従い、いかなる利益よりも民族的利益が最優先することを念頭においてほしい。

統一指導部は、近く、特別なアピールを発行して、パレスチナ国家が採用する法的手続きを（調査に関連した手続きも含む）を決定する最高司法委員会の設置を明らかにする予定である。

それまでは、当該委員会の皆さんが正しい方法と調査の規則を作つて活動するよう、また、暴力による拷問によって作った調査報告を採用しないよう、呼びかける。統一指導部は、いかな

雷斯チナ人民を恫喝する陰謀に抵抗する。

・八月九日から一五日までは、八月一三日に起きたテリ・ザタルの虐殺に抗議する闘争拡大の機関である。この期間中は、民族的デモを行ひ、シオニスト兵や入植者ギャングどもとの激烈な対決を展開し、パレスチナの旗を掲げなくてはならない。

八月三〇日。米国の侵略的立場に抵抗し、パレスチナ人民を恫喝する陰謀に抵抗する。

・八月二一日は、アル・アクサ・モスクを焼こうとした陰謀を弾劾する。この日は、特別な闘争激化の日である。

皆さん。以下の活動を行おう。

・ゼネストの日 八月九日は、インティファードが三三カ月目に入るのを記念する。

八月二二日は、アル・アクサ・モスクを焼こうとした陰謀を弾劾する。この日は、特別な闘争激化の日である。

同時、統一指導部は、尋問の名目で行われる拷問反対の立場を明らかにするとともに、拷問の行きすぎについては、我々内部の統一が損なわれかねない危険を阻止するために、道理と論理に依存し、我々の隊列を破壊し、我々の能力を損なおうとする敵の陰謀に対し、警戒を高めよう。

この間の行きすぎについては、我々内部の統一が損なわれかねない危険を阻止するために、道理と論理に依存し、我々の隊列を破壊し、我々の能力を損なおうとする敵の陰謀に対し、警戒を高めよう。

家賃を値上げしなかつた不動産所有者の皆さんは、統一指導部は、再び讃える。家賃を滞納しているすべての皆さん、すぐに、家賃を払おう。また、値上げした家賃の支払いをドルや、ディナールなどの外貨で要求する大家には警告する。

この間の行きすぎについては、我々内部の統一が損なわれかねない危険を阻止するために、道理と論理に依存し、我々の隊列を破壊し、我々の能力を損なおうとする敵の陰謀に対し、警戒を高めよう。

東への軍事介入への支援であり、このガルフ危機を拡大させているのである。

我々は、日帝が、米帝の中東介入への支援を直ちに止める要求する。

二、「人質問題」は、日帝の態度に根柢がある。日帝は、自らが何をしているのかを理解していない。日帝は、米帝の中東の戦略を物質的に支え、介入を支援しているにも拘わらず、西欧や米国とは違つて、「人質」にされないと考えていた。そして、日帝のクウェート大使館は、大使が休暇をとり、代理大使しかいない状態であり、日本人の保護に対してもなんら準備を行つていなかつた。

日本人が「人質」になつてゐるのは、あげて日帝の行動にその責任がある。日帝は、イラクを「人質問題」で批判する権利を持つていない。问题是、アラブ民族の問題であり、アラブ自身によって解決することを阻害し、米帝の介入を支援することは、アラブに対する敵対行為以外のなものでもない。「人質」の運命は、日帝の行動にかかっているのである。

日本人の「人質」解放のために、直ちに、米帝と同調した行動を停止し、アラブとして解決のために、行動せよ。

三、日帝の自衛隊派兵策動を糾弾する。

日帝海部政権は、米帝の圧力の前に、財政的物質的な支援だけでなく、自衛隊の派兵も目論んでいる。これは、日帝の軍事的な侵略、軍国主義への道を開くものであり、我々は、断固として反対する。

の軍事行動に対し、財政を援助しており、これは、明らかに国連の平和維持活動とは、違うものである。自衛隊の派兵もまた、国連を隠れ蓑にして、日本の人民とアジア人民を欺き、実質的な自衛隊の海外派兵の道を開くものである。これは、日本を再び軍国主義に導くものである。

日帝海部政権は、現行憲法を現在の日本の国民的な意識から、改悪することができないため、憲法上の解釈を拡大することによって、自衛隊の派兵の道を開こうとしているのである。われわれは、自衛隊のいかななる形の海外派兵にも反対する。また、現在の派兵に向けた策動に反対する。

四、現在のガルフ危機は、アラブ民族で解決すべき問題である。

イラクのクウェートの軍事的併合は、アラブ民族として解決すべき問題である。イラクの軍事によるクウェートとの紛争の解決は否定されなければならない。クウェートがサバーハ一族によつて、アラブ民族の資源を帝国主義の保護のもとで独占し、少數の一族の贅沢な生活のために、浪費してきた。その一方で、他のアラブ民族は、パレスチナ人民のように、シオニストの支配の下で、困難な生活をおくり、また、他のアラブ諸国も累積債務を抱えて、経済的な危機の状態にある。

さらに、湾岸協力会議に結集するサウジ、UAEなどの反動王政は、帝国主義と協調しながら、イラクを含む他の産油諸国とも対立してきる。クウェート、湾岸の反動王政自身が帝国主

一、九月いっぱいは、シオニストによる占領とヒジャズの地に対する米の侵略に対決する民族主義的、戦闘的日々としよう。国旗を掲げ、民族的スローガンを書き、反占領デモを組織しなくてはならない。

二、毎週金曜日は、シオニストによる占領と残虐な行為に対する対決を高める日々としなくてはならない。そして、すべての人が祝福されたアル・アクサ・モスクで祈りを捧げ、その後、反占領デモをやらねばならない。

三、九月五日は、インティファーダが一〇〇〇日を迎える誇りの日を記念する。商店は夕方六時まで営業し、デモを行い、お祝いをしよう。パレスチナ国旗を掲げ、民族衣装をまとい、「インティファーダは、独立国家結成の日まで継続する」という統一スローガンを民族指導部名で、あらゆる場所に書こう。

四、九月九日は、インティファーダが三四カ月目に突入するのを記念するゼネストの日。

五、九月一五日から、パレスチナ国は、冬時間を探用する。商店は、夕方六時まで営業しよう。殺抗議のゼネストの日。商店は夕方六時まで営業しよう。

の侵略に抗議するゼネストの日。

一〇、九月二七日から三〇日までは、闘争の日々。パレスチナの国旗を多數掲げ、インティファーダが一〇〇〇日に到達したのを記念する式典を催し、民族衣装で着飾る。

P L O・統一指導部 エルサレムにて

一九九〇年八月二九日

日帝の自衛隊派兵策動を糾弾する

一九九〇年九月二七日　　日本赤軍

一、日帝は米帝の中東介入を支援し、アラブ人民に敵対している。

現在のガルフ危機は、アラブ民族の問題であるにもかかわらず、米帝が帝国主義的な野心をもって軍事的に介入したことによって、危機が拡大している。この二〇年間の米帝は、帝国主義の戦略的資源である石油の確保のために、アラブに米帝軍を駐屯させ、アラブの資源を米帝の力のもとに置くことを野望していた。米帝の軍事介入は、イラクのクウェート併合を利用して

石油輸入の七一%を湾岸諸国に依存し、うちイラクとクウェートから一四・一%を輸入している日本帝国主義は、この米帝の策動に呼応して、国連の決議を待たずに、八月五日、イラク・クウェートからの石油の禁輸などの措置を実行した。さらに、日帝は、国連ではなく、この米帝の大規模な軍事介入を支えるために、八月二九日に、多国籍軍へ一〇億ドルの輸送、資材、医療、資金のための予算を決定した。また、さらには、民間航空機、船舶などのチャーター、医療協力のために一〇〇人の医療団派遣の準備、ヨルダン、トルコ、エジプトなどへの一〇〇〇万ドルの援助などを決定した。さらに、九月に入つて、米帝の圧力のもとで四〇億ドルに援助を増額した。

米帝のベトナム侵略以来の大規模な軍事介入は、財政危機にある米帝自身によつて、支えることができず、日帝の財政的な支援なしには、実現することができないものであつた。日帝の四〇億ドルは、米帝軍の四ヶ月の経費に該当する。この日帝の行為は、アラブ自身での問題の解決を阻み、米帝の帝国主義的な野望を積極的に支えているのである。日帝海部政権が言う「平和准寺活動」でもなんでもなく、米帝の中

問者は処断することを明らかにする。
新たな紛争の種を播くために、人民の財産を攻撃したり、人民の財産を売り払ったりしてい る泥棒やブローカーがいるので、これに対決しようと。

七、九月一八日は、シオニストに囚われた獄中の英雄との連帯の日。ストをやろう。
八、九月二〇日から二五日までは、殉教者、負傷者、獄中者の家族との連帯の日々。これらの家族の皆さんを訪問しよう。

て、この野望を実現することにあつた。米帝は、この野望をかくすために、国連を動員して、その軍事介入の正当化を行おうとしているのである。米帝の帝国主義的な野望を知っているアラブ人民は、それゆえに、現在の情勢の中心を米帝

義の手先としてあることは明確である。また、クウェートの存在自身が自らの帝国主義的な利益を維持しようとした英帝が、人為的に作りだした国であり、主権国家としての存在自身が疑問となるような国である。

イラクの行動へのアラブ人民の熱烈な支持は、こうしたクウェート、湾岸諸国のあり方にに対する怒りによって、生まれている。

サウジ反動王政が、米帝軍を引き入れることによって、反動王政の延命と帝国主義権益を防衛しようとしたことで、アラブ民族としての解決の方向は、混乱させられることになつていている。しかし、重要なことは、石油資源は、アラブ民族の財産であり、これがアラブ民族に正当に返される方向で解決されなければならないし、また、帝国主義と結託した反動王政による独占をやめさせなければならない。

われわれは、アラブとしての平和的解決のための努力を支持し、帝国主義のアラブからの撤退を要求する。

四、米帝に反対し、日帝に反対する闘いを強めよう。

現在、米帝は、国連の決議によって、自らの介入を正当化し、その帝国主義的な野心を隠そうとしている。ソ連、東欧の解体状況は、国連で米帝の行動を規制する力を失わせている。そして、国連自身が米帝の軍事介入を正当化するあり方になつていて。

現在の情勢のなかで、各国民が、相互に支援しあい、帝国主義とたたかうことが問われて退を要求する。

続けてきたのに、なぜ、米は何もしなかったのか？ 人権、民主主義、承認された国境への米の配慮が、今回、数万の米軍と最新鋭技術をガルフに送りこむ真の動機なのか？ ベトナム、レバノン、グレナダ、パナマ、または他の国への米の軍事的十字軍の歴史をみれば、それらの問い合わせるには容易である。今回の侵略は、大げさな原則の名の下に行われたが、真の問題は、なりふり構わない利益の追求である。それは、搾取のルート、資源と領土の戦略的支配を握るためである。第二には、イスラエルを保護するに必要な程度の地域の安定を維持するためである。イスラエル自身は、アラブ民族解放運動の成長とアラブ世界の発展に歯止めをかけるよう、任務規定されているのだが。だが、現在の危機においては、イスラエルの手に余るのである。とくに、イスラエルが一方ではインティファーダとの対決に追われ、他方では、イラク軍の強さという条件がある。

だが、米が後楯となつた侵略や内部擾乱に、イスラエルが関与しないという証拠はない。事態の発展によるだろう。元米統合参謀部の戦略立案者によれば、「我々に可能な限り早期に、内部擾乱の検討を開始したほうがよい……もし、我々が（イラク）政権の打倒を望むなら、イスラエルと共同すべきだ」（インタナショナル・イスラエルの役割

）。

ヘラルド・トリビューン紙（八月九日）とのことだ。イスラエル指導部は、軍事解決方法を望んでいるようだ。八月一五日、住宅相のアリエル・シャロンは、「状況は、真剣な即応を要求している……イラクに多大な打撃を与えないようないかなる対応も、イスラエルが受けているこの危険を解消することにはならず、解消できるのは、唯一軍事的攻撃のみ」と主張した。

八月第一週に、イスラエルは、サウジ、またヨルダンに対するイラクのいかなる動きも、受け入れられないみなすとの立場を打ち出した。歴史的に、イスラエルがアラブの土地、国境を無視してきたことからも、これは、最小の口実であるとしても、ヨルダン侵略の恫喝と理解される。

帝国主義—シオニストの手前味噌の典型であるが、完全に平和で許容できる中東情勢下でイラクは、クウェートへの行動を起こしたと、帝国主義—シオニストは主張する。現実は、この間、主要是イスラエルがPLOの和平イニシアチブを頓挫させ、イスラエル—ペレスチナ対話を開始させようとした米の努力すら妨害したので、戦争の機会が強まってきたのである。

この間のイスラエルの政治戦略の主要な方向は、インティファーダから注意をそらし、イスラエルが、石を投げる子供や翻る旗によってではなく、「血に飢えた」アラブ軍の脅威に曝されていくということを再度打ち出すことにあつた。

この危機は、シオニストにとっても、米の政策決定者がイスラエルに対する大きすぎる軍事、

いる。現在の米帝を始めとする帝国主義諸国の大後方である在日米軍基地に対する闘いを強め、また、米帝の戦略に呼応した日帝の策動に反対する闘いを強めていかなければならない。

そして、日本人民、革命勢力の責務として、自衛隊の海外派兵を導くいさいの現れに対し闘いを許すことは、帝国主義に反対する勢力に對するより暴力的対決を許すことになる。われわれは、日本人民と共に、中東への介入の努力を許すことによって、自衛隊の海外派兵を導くいさいの現れに対し闘いを許さなければならない。旧日帝の中国へ飛行した。現在の日帝の動きも、「国益のため」「邦人の安全」などが名目となって、自衛隊の派兵を実現しようとしている。そして、それは、再び、アジア人民に対する軍事的な侵略につながるものである。われわれは、日本の軍国主義の道を阻止し、アジア人民、アラブ人民とともに生きるために、この自衛隊の派兵に対して、断固として闘う。

パレスチナ勢力の見解

① PFLP デモクラティック・パレスチニア誌四〇号（一九九〇年七月—八月号）

現在の矛盾の結果は、予測が困難ではあるが、すでに、アラブ政治における劇的な同盟を形成してきた。この危機が世界的なエネルギー政策に関連しており、ペレストロイカの時代に発生

・新しい霸権を求める十字軍

ベトナム戦争以来最大規模の海外派兵である米の介入は、現在、最重要な問題となつていて、この地域紛争について、自らの軍事存続を強化し、中東に政治的、戦略的支配を強化する千載一遇の好機ととらえた。現在の国際情勢下では、ソ連からの反対の反応を引き出す懸念もなく、米は霸権を押しつけることが可能である。米ソ間の敵対は、帝国主義と第三世界を名指ししていた。米政府の国家安全戦略に関する報告では、次のように述べられている。

「第三世界が紛争を技術的に先端化させる傾向を強めているので、わが軍への真剣な要求が高まるだろう」（三月二日、A.P.）。レーガン政権時代に作った世界的な軍事力量の配備とLIDW戦略の展開は、高強度侵略としか命名しようがないものに結実した。

クウェートについて、なぜこれほど騒ぐのか？ ワシントンは、それほど、クウェート人民に配慮しているのか？ そして、この二三年間、イスラエルが西岸、ガザ、ゴラン高原を占領し

財政援助を検討するのを止めさせる好機を与えた。

ガルフ危機は、両国が戦略同盟の関係のなかで、共同の軍事立案を開始するにふさわしい場所を与えた。この関係が作りだした最新のものは、米統合参謀総長パウエルのイスラエル訪問後に実現されたが、米の資金でイスラエルが開発生産したアロー・ミサイルの試射である。

現在まき起っている反イラクのヒスチリーのなかで、忘れてはならないのは、イスラエルが、この地域では最大の軍事力を誇り、核兵器を所有する唯一の国であるということである。イスラエルの新たな侵略を全面否定することはできないし、これは、米にとっての中東における戦略資産としてのイスラエルの価値を再確認するものである。

・米の読み

米は、世界的な指導性を發揮し、介入の出撃基地として、歐州と中東の軍事基地を利用する時期が熟したと判断した。国連安保理が、イラクに対して制裁を課したが、これは、東西の欧洲が主要な問題で足並みを揃えた最初の件となつた。唯一キューべとイエメンが棄權した。この国際的なコンセンサスのつて、米は、英、オーストラリアの海上封鎖参加を得て、この制裁決議をイラクに対する全面的な経済封鎖に拡大解釈していく。ここでも、二枚舌がある。なぜなら、米英とも、数十年間もの間、南アフリカに対する制裁に反対し続け、そうしたドラスチックな措置を実行することなど夢想もしなかつた

進歩的民族主義の視点では、この政策と戦う必要がずっと以前から存在した。大衆レベルでは、自然発生的なサッダム・フセイン支持の多くは、石油王国内で肉体労働をしている貧困者（イエメン人、エジプト人、ヨルダン人、パレスチナ人などを含む）の反発からきている。大衆的感情の他の理由は、イラクがイスラエルに対決する姿勢を宣言したこと、また、イラクが中東における帝国主義の直接攻撃の槍玉に上げられたからである。

この点で、現在の危機は、アラブ人民と植民地主義・帝国主義の支配との闘争の延長であるだろう。この構造は、今世紀を通じて、中東の特色をなしてきたものである。一九〇〇年代の

が、クウェートからの撤退条件として、米軍の撤退と合わせて、イスラエルに一九六七年以来の占領地からの撤退を要求したのは、完全に正しい。だが、イラクがクウェートに対して行動を起こしたのは、実際には、この要求に基づいてのことではなかった。むしろ、イランとの戦争によって起きたイラク経済の損害から再建していく時、サッダム・フセインは、石油問題が生死を決するものとしてあると認識したのである。イラクがクウェートに対して行動を起こす直前、石油価格は石油過剰生産によって世界の石油市場に石油が溢れ、過去九年間最低の価格になっていた。

いっては、英がこの様式の先鞭をつけ、その後、帝国主義の利益に従う支配者達の手に石油を維持させつつ、米がこの分割・統治政策を維持してきた。そうした政府の石油政策と、経済的独立と近代化を求めて民族主義政府（イラク、アルジェリア、リビア）が展開しようとする石油政策の相違が生まれる背景には、こうした問題がある。クウェートは、石油の過剰生産を行つて、世界市場に石油を溢れさせ、その結果として低価格を保つ政策を展開しているサウジに率いられた伝統的アラブ・ブロックに属している。この政策の他の側面は、オイル・ダラーを資本主義諸国に投資したり、豪勢な計画に使つたりして、アラブ人民が開発に必要とする資金を奪うこととで、オイル・ダラーをリサイクルさせてい

後半、シオニスト国家が帝國主義の前進基地として形成されたことをもって、この矛盾はアラブ・シオニスト紛争の形態をおび、その中心がパレスチナ－イスラエル紛争であった。現在、この矛盾の最も顕著な表現は、イスラエルの占領に対峙するパレスチナのインティファーダの闘争である。したがって、アラブの現状を是正するいかなる努力も、インティファーダの発展に影響を与えるか、また、一般的にはパレスチナの大義に影響するかから判断されるべきである。なぜなら、パレスチナのインティファーダが、反帝、反シオニズム、反反動の大衆的闘争の前衛であるからだ。

現在の情勢に対するPLOの路線は、米帝のガルフ介入に対する闘争を、パレスチナの反占領と結合させてること。一二〇、一九〇

アラブ側の主要提案

- ガルフ危機に関するアラブ側の主要な決議と提案（主旨）
 - 八月三日—カイロ
 - ・アラブ連盟緊急外相会議決議
 - ・イラクの即時撤退要求

- ・アラブ連盟緊急アラブ・サミット会議
- 八月一〇日一カイド
- 一、今月三日のアラブ外相会議の決議と同四日のイスラム諸国会議声明を確認する
- 一、（クウェートからのイラク軍即時撤退や経済制裁など）国連安保理決議六六〇、六六一、六六二の順守を確認する
- 一、イラクのクウェートへの侵略を非難する。併合宣言は認めず、イラク軍の即時撤退を要求し侵略前の国境を尊重する
- 一、アラブ連盟と国連の加盟国として、クウェートの主権と安全を保証し、イラク侵攻前の正統政府の復帰を主張し、原状回復のために取る手段を全面的に支持する
- 一、沿岸諸国へのイラクの脅迫とサウジ国境へ

国連総長デ・クエアールは、その行為を許可する国連決議のないところでは、封鎖は不法であると宣言し、歐州は、イラクに対する制裁をどのように実行するかでは分裂しているようみえる。だが、そうした躊躇は、対決の道を進む米に影響を与えるには、不十分であることが立証された。逆に、米は、歐州の同盟国やソ連と継続して討議を重ねつつ、米の主要な政治活動は、他の諸国に足並みを揃えるよう脅かして回ることにある。その端的な例は、イラクとの全貿易を断絶するようヨルダンに迫っていることである。危機にさらされたヨルダン経済が、その貿易に非常に依存しているにも拘わらず、同時に、もしイラクとの対決を回避しようとする時には、フセイン国王のみが仲介役を果たせる可能性がある。八月二五日、国連安保理は、決議六六五号を採択し、イラク向け、イラク発の船舶に対して、いかなる必要な措置をとること、また臨検することに合法性を与えた。再度、キューバとイエメンのみが棄権した。この決議のおかげで、米英、および他の諸国は、軍事力で封鎖を実行する許可を得たのであり、それは、戦争の引き金になるかもしれない。

米戦略は、イラクを絞め殺すまで物理的、経済的に孤立させ、それが内部崩壊に発展し、サッダム・フセインの打倒にまで至っていくことを期待しているようだ。ブッシュは、イラクの政権転覆をCIAに秘密指令で命じたが、同時に、直接的な軍事対決を挑発する道をもめざしてい

とくに、予備役召集決定により、米軍は、二五万にも膨れあがるうとしているが、長期戦に備えている。アラブの石油に直接支配をふるう

十字軍遠征をもち、米は、以前なら米軍駐留を嫌つたサウジ、UAEという二カ国から公式に招請されたのである。米は、バハレーンには、すでに軍事存在権を確保しているが。アラブ連盟が会議を開いてアラブ軍派遣によるアラブの解決の展望に先駆けて、米の指導下にあるサウジにアラブのある国々の軍が存在するという条件を作り、米はアラブの隊列の分裂に成功した。実際、アラブの親米諸国は、米の介入に入アラブのカバーを与えるためにのみアラブ・サミットを利用した。そのサミット議長を務めたエジプトのムバラク大統領は、PLO議長アラファトが提案したものを持めて、アラブの政治的解決案を見つけることにむけ、提案された種々の合理的な提案を拒否した。サウジ、エジプト、モロッコなどとの長期にわたる同盟関係を手玉にとり、他方では、アラブ内部の矛盾の激しさを

・中東の観点から

一方、米の介入は、この一〇年間かつてなかつたような圧倒的な大衆の感情を示した。多数のアラブ諸国で、巨大なデモがあり、米の計画にそつてアラブ諸国のうちに米の軍事力建設がなされたことへの弾劾が示された。

もつとも切迫した米のあからさまな介入という問題はこれくらいにして、アラブの位置からみた危機の姿を見てみよう。

イラクは、クウェートが自國領土の一部であると主張する。本当に、現代國家のふりをしているこれらの小さな首長国の存在は、植民地主義の分割・支配政策の結果である。ガルフにお

提案（無）

- ・アラブ連盟緊急外相会議決議
 - ・イラクの即時撤退要求

- ガルフ危機に関するアラブ側の主要な決議と、提案（主旨）
 - 八月三日—カイロ
 - ・アラブ連盟緊急外相会議決議
 - ・イラクの即時撤退要求

八月一〇日—カイド
・アラブ連盟緊急アラブ・サミット会議
一、今月三日のアラブ外相会議の決議と同四日
のイスラム諸国会議声明を確認する
一、（クウェートからのイラク軍即時撤退や経
済制裁など）国連安保理決議六六〇、六六一、
六六二の順守を確認する
一、イラクのクウェートへの侵攻を非難する。
併合宣言は認めず、イラク軍の即時撤退を要求
し侵攻前の国境を尊重する
一、アラブ連盟と国連の加盟国として、クウェー
トの主権と安全を保証し、イラク侵攻前の正統
政府の復帰を主張し、原状回復のために取る手
段を全面的に支持する
一、沿岸諸国へのイラクの脅迫とサウジ国境へ

・イラク、クウェートを第一九番めの州に編入。

二九日（水）

・OPEC、増産決定。

・日帝、「中東における平和回復活動に係るわが国の貢献策」発表。

三〇日（木）

・アンマンで、イラク外相—国連事務総長会談。

九月一日（土）

・カイロのアラブ外相会議（一二一カ国参加）、イラクの無条件撤退、対クウェート賠償要求決定。

二日（日）

・カザフィ、ガルフ危機解決案提案。

四日（火）

・PFLP議長、バグダッドへ。

五日（水）

・峰起一〇〇〇日目

・ソ連外務省発表

・ソ連の将校をも含む国連指揮下でのガルフ派兵意志あり。

七日（金）

・ソ連外務省発表

・ソ連の将校をも含む国連指

・九日（日） 蜂起三四カ月目に入る

・ヘルシンキでソ米サミット。

編集後記

・ここ中東では、被占領地の戦いで、イラク支持のストーランが今でも書かれているように、国家政治の枠を離れ、人民レベルの感情には、イラク支持が強く残っています。それは、とりも直さず、アラブにおいて、「反帝・反反動・

反シオニスト」が、いかに強く、帝国主義と結託した反動王制に対する非難がいかに深いかを示しています。そうした人民の歴史的に強固な反帝の立場を、帝国主義の軍事介入を止めさせ、アラブの枠組みで解決していく方向を領導していく指導力がパレスチナ革命勢力に問われています。

・そのなかで、日帝は、米帝にまったく追随し、「国連」という枠組みを掲げて、自衛隊の派兵にむけた策動を強化しており、とくに危険なのは、憲法をそのままに、現時点で最大限の拡大解釈と、「国連平和協力法」なるものをでっちあげることで、急速に世論作りを行っていることです。こうした露骨な方向は、この中東においても、非難をもつて迎えられています。「人質問題」の長期化は、こうした日帝の政策がもたらしているものです。

・ソ連・東欧が、「国際主義」を忘れてしまった現在、反帝闘争、反安保を軸に、いっさいの自衛隊の海外派兵策動と対決していくことを通じて、帝国主義本国の進歩勢力、人民が、「国際主義」実践を行っていくことが火急に問われています。今回の「ガルフ危機」を利用して、帝国主義が反帝闘争の正義性を解体しようとしている策動と闘い、より帝国主義—第三世界の闘う進歩勢力、人民が連帯し、支えあっていくことが、新たな反帝闘争の高揚を作っていく鍵となっています。その意味でも、国際情勢からみて、日本国内における反基地闘争が、非常に重要な位置をしめています。

東京後記

国連平和協力法

なる美名で、自衛隊の海外派兵をすることが、日本の国際的に貢献する道だと海部政権はいう。国会での論議はもとより、連日の集会やデモなど、世情は騒然としてきた。拡大解釈と詭弁でゆれうごく憲法をめぐる国会審議に、民衆の批判の声が高まり、ついに札幌市議会は「国連平和協力法の撤回を求める決議」を可決した。

海部首相がヨルダンで対イラクの経済封鎖の強化を要求している同じ時期に、フランスからは中東和平提案が伝えられ、経済封鎖の強化より、イラクに風穴を開ける方が中東の平和的和解への道だとの声が聞こえてきた。旬日をへて、イラクはフランスのいわゆる人質の全員解放を始めた。日本の人質だけがとり残されている。国連決議の前に経済封鎖を実施した日本政府が、どんな美名をちらばめても、アメリカにだけ奉仕したものが証明された。海外派兵の道の是非を論ずる前に、平和憲法そのままのとて国際的に貢献する道が選択されなければならない。これこそが日本独自の道であり、世界に誇れる道だと思う。

本誌は59号で「イラクのクウェート侵略」の概要を伝えた。この60号ではアラブ情勢を前面展開して論じている。

JRA重信房子リーダーの「日本の皆さんへ」との一〇月初旬のテーマを東京編集でまとめ、これを号外にしてアラブの理解と日本のとるべき道を考える一助とする。